石膏標本

ｆｅｍｃｉｒｃ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
石膏標本

【Ｎコード】
Ｎ０００９ＣＤ

【作者名】
ｆｅｍｃｉｒｃ

【あらすじ】
性的に放蕩な女性研修医は婦人科部長の逆鱗に触れ、性欲異常亢進症の治療を名目に、臨床実習で同期生たちによって陰核切除術を施されることに……。

第一話　宿直室にて

「ジョージー！　ステファニー！　あなたたち、いったい何をしているの！！」
　突然の激しいノックとともに、宿直室の中にサンダーソン先生の甲高い怒声が飛び込んできた。
　おかげで、私のオルガズムは中断を余儀なくされてしまった。あともう少しでイクところだったのに……。
「こんな破廉恥なこと……宿直室のベッドで行うなんて、どういう了見なの！？」
　狭い仮眠用ベッドの上で絡み合う私たちの裸の体が開け放たれたドアから差し込む廊下の薄明かりによって、ほんの僅かに照らされる。同時に廊下の冷えた空気が暖房の効いた室内に流れ込んできて、汗にまみれた体から急激に体温を奪っていく。
　でも、私が鳥肌を立てて震えたのは、その寒さのせいだけじゃない。怒りに満ちた眼差しで私を見つめるサンダーソン先生の翡翠色の瞳が、これまでにないほど冷え冷えとしたもので、それが私の心を凍えさせたのだ。
「ジョージー、あなたが誰かまわずに、こんなふうに淫らな行為をしている場面を、いったい何度、私が注意したと思っているの？あなたは、この聖ジョセフ病院のすべての女性研修医と淫らな関係を持たないと気がすまないのかしら！？」
　さらにサンダーソン先生は、私の下半身にうずくまるように身を伏せているステファニーにもその怒りの矛先を向ける。
「ステファニー、ジョージーの股間から早く顔を離しなさい。いったい、あなたは、フィアンセに、どんな言い訳をするつもりなの？
　――ともかく、その汚れた顔を洗って、口の中をゆすいできなさい！！　本来ならば、あなたは、三十分前にトムソン夫人の血液検

査をしているはずでしょ。ただちに研修勤務に就きなさい！」
　そのサンダーソン先生の厳しい声に身を震わせたステファニーは、ベッドから抜け出して慌ただしく身なりを整えると、顔も上げずに——まさに影のように部屋から抜け出していった。
「ジョージー、こんなことばかりしていては、あなたの評価は下がるばかりよ」
　再び、私に視線を戻したサンダーソン先生は、ややくたびれたような口調になっていた。そして、私とステファニーが愛し合った最中に、二人の裸の体から零れ落ちた汗と愛液にまみれたベッドシーツを見つめながら言葉を継いだ。
「——そのうえ、宿直室のベッドまで、こんなに汚してしまって……。宿直当番の研修医は、みんな、このベッドで仮眠するのよ。この病院の研修医というだけで、どうして、誰もかもが、あなたの体液にまみれたベッドで仮眠しなければならないのかしらね！？」
「シーツの洗濯は、私が自分でやりますわ」
　私は、サンダーソン先生の皮肉混じりの言葉に対して、やや控えめに言い返した。
「口答えをしないで！　すでに勤務時間に遅刻しているあなたが、どうして、シーツを洗う時間を持てるというの！？　それに、あなたもステファニーと同様、体を清めなければいけないわ。——本当に、あなたは、この病院に居着いている色情狂のトラブルメーカーだわ！」
　不用意な反論は、彼女の炎のように燃えさかる怒りに油を注いでしまったようだ。私は何も言わずにドアに向かって歩き始めようとした。しかし、その歩みは、心を凍らせるような冷たい声音によって遮られる。
「ジョセフィーヌ・ホーカー、本日、あなたが研修勤務に就くことを禁止します——そうね、白衣を着替える必要もないわ。身を清めたら、私の部屋に行き、そこで私が戻るまで反省して待っていなさい。それと、明日から一週間、研修勤務時以外は、あなたが他の研

修医と接触することは厳禁よ。他の研修医たちの医学研修をこれ以上滞らせるわけにはいきませんからね。ジョージー、私はね、発情している野良猫の前に大事な血統書付きの猫を放り出すような真似、もうするつもりはないわよ！」

サンダーソン先生は、そう言い残すと足早に立ち去っていく。そして、私は、彼女が廊下の先で看護師に向かって、シーツを洗うように大声で命令するのを聞いた。たぶん、病院内の誰もが——そう、入院患者でさえも彼女の喚き声が聞こえただろう。

サンダーソン先生は、すでに私のどのような言い訳も聞く耳を持っていないようだった。確かに、そろそろさじを投げられても仕方がないかもしれない。すべては、これまでに私が引き起こしてきた数々のトラブルに起因しているのだから自業自得と言えば、まさにそのとおりなのだ。

私が廊下に出ると、同じ医学研修課程の属しているゴードンがにやにやと嫌らしい笑みを浮かべながら立っていた。そうやっている彼は、背が低いこともあって、まるで女の子をからかって遊んでいるジュニアハイスクールの少年のようだった——とても研修医には見えない。

「ジョージー、そんなに体を持て余してるなら、僕がいつでも相手になってやるよ」

「余計なお世話よ！」

私は、自分の顔よりも下にあるゴードンの眼鏡顔を見下ろしながら言い返した。

「こんなところで油を売っている暇があったら、さっさと自分の研修勤務に戻ったら？」

「勤務時間中にステファニーとしけ込んでいた君に言われたかないな」

ゴードンは、やや視線を下げて私の胸に好色な目を向けながら答える。

「私が何をしようと、あなたには関係ないでしょ。だいたい、私は、

あなたと違って成績に問題がないから、少しくらいサボっても大丈夫なの」

セクハラぎりぎりの言動を弄するゴードンに対して、怒りを爆発させた私は、彼のコンプレックスである研修成績のことに言及してしまった。言い始めた直後、これはまずいと思ったが、止められなかった。

「あなた、このままだと研修課程、修了できないかもしれないわね。少しはデイビッドを見習ってみたら？」

ゴードンの顔色の変化は、劇的だった。私の毒舌を耳にした直後、一瞬、顔を青ざめさせ、それから真っ赤にして怒鳴り返してきた。

「き…、君だって……、せ…、成績に問題がなくても素行に問題があるだろう。お…、お互い様じゃないか！　それに、あんなオタク野郎と僕を比べないでくれ。ふ…、不愉快だ！」

いたくプライドを傷つけられた様子のゴードンは、屈辱で満面を朱に染め、大きな足音を響かせながら歩き去っていく。

私も、できるだけ早くサンダーソン先生の執務室に出頭するために、シャワールームに向かって急いで歩き出した。ともかく少しでも反省している態度を見せなければ、この病院から追い出されてしまう。それだけは確かにのゴードンの言うとおりなのだ。

第一話　宿直室にて（後書き）

　この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作は今は亡き　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　グループに投稿された　Ｍｅｒｅｄｉｔｈ　氏による、„Ｍａｋｉｎｇ　Ｒｏｕｎｄｓ．„です。日本と違って海外では非常に多くの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説が書かれていますが、その中でもベスト１０に入るだろうと訳者が個人的に思っている傑作中の傑作です。
　Ｍｅｒｅｄｉｔｈ　氏は、この作品以外にもいくつの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説を書いていますが、残念なことにｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　界から去ってしまっており、ここ何年も新作を執筆していません。
　作品のタイトルについてですが、これにはずいぶんと悩みました。原題の　„Ｍａｋｉｎｇ　Ｒｏｕｎｄｓ．„　は単純に訳すと『巡回』となります。しかし、話の内容からすると、どうもしっくりしません。単語レベルでいろいろと意味をすり合わせた結果、„Ｍａｋｉｎｇ„　を『作ること』あるいは『製作』とし、„Ｒｏｕｎｄｓ„　を『丸彫り（像）』とし、それを組み合わせて　„Ｍａｋｉｎｇ　Ｒｏｕｎｄｓ．„　を『彫像造型』という意味合いに取ってみました。さらに、それを内容に合わせて『石膏標本』と意訳してみました。
　なお、自分には医学的な知識はまったくありませんので、本文中の陰核を切除する手術シーンの描写や手術中の登場人物たちのセリフに関しては、けっこういい加減です――というか、ほとんど妄想の産物です（笑）

第二話　婦人科部長室にて

「ジョージー、起きなさい！　私の椅子に座って寝ているなど、あなたは、いったいどういうつもりなの！？　さっさと私のデスクから離れなさい！」

私は、サンダーソン先生の怒鳴り声で目を覚ました。先生が戻ってくるのを待っている間に、ついうたた寝をしてしまったらしい。

「えっ……？」

左腕に着けている時計を覗きこむと、あれから七時間も過ぎていた。これでは、うたた寝どころではない——完全な熟睡だ。そのうえ、私は、なぜかサンダーソン先生のデスクで眠りこけていたのだ。

あまりの出来事に自分のしでかしたことが信じられず、私は呆然となった。そんな私を睨みつけるをサンダーソン先生の鬼のような形相がとても恐ろしかった。

私は慌てて椅子から立ち上がろうとして、大きくふらついてしまった。頭の方は、驚愕したことによって完全に目覚めていたのだが、体の方は、まだぐっすりと眠った状態だったらしい。それでも無理に立ち上がろうとしたので、私は膝が折れて床に跪いてしまった。

「ジョージー、何をしているの！？　さっさと立ちなさい。物乞いのように嘆願しても、私の考えは一切変わらないわよ！　それとも、あなたお得意の口頭奉仕でもするつもりなのかしら？　まあ、どちらにしても医師を目指そうとする教養ある女性がするようなことではないわ！　——それと、この椅子に座りたいのなら、あなたは婦人科部長になる必要があるわ。まあ、私には、それが実現できることとは思えないけど」

私は、その罵詈雑言を聞きつつ、よろよろと立ち上がり、机の前に置かれている硬い木製椅子に苦労して腰を下ろした。

一方、サンダーソン先生は、あたかも私の温もりが彼女の椅子を

汚したかのように、その表面を神経質に拭いていた。そして、その作業を終えると革製の回転椅子に静かに座り、背もたれに寄りかかって机の上で両手を組んだ。
　沈黙を守ったまま、人を射るような視線で私を見つめるサンダーソン先生の様子は、とても恐ろしかった。私は、それに対して、なんとか正面から向き合おうと試みたが、冷たく暗い眼差しに、一分と経たず、視線を下に落とさずにはいられなかった。
　サンダーソン先生は、怒っていた。これまでにないほど怒っていた。本当に心の底から怒っていた。
　半日前に彼女が零した皮肉混じりの言葉、そして、たった今なされた罵詈雑言の数々……。品性卑しからぬ老婦人の言動とは、とても思えないものだった。聖ジョセフ病院に勤めるすべての医師や看護師から敬われている婦人科部長は、ふだん、このような悪し様な物言いなどは決して口にしない人なのだ。
　私の途方に暮れた視線は、サンダーソン先生の机上を彷徨っていた。『婦人科部長』と刻印された彼女のネームプレートを通り過ぎ、黒と赤のボールペンが差し込まれている精神安定薬とバイアグラを宣伝するペン立てに向けられた。
　謹厳実直で厳格な女性の机上にバイアグラの広告があるなんて、なんと逆説的なんだろう――とりとめもなく、そんなことを考えてしまう。
　そのとき、突然、サンダーソン先生が口を開いた。
「ジョージー、今、あなたが目を留めたのは、どれかしら？　このバイアグラ広告のペン立て？　それとも隣の石膏標本かしら？」
　そう言われて、私は、初めてペン立ての隣に置かれた石膏標本に目を向けた。
　男性の拳大の石膏標本は、女性の外性器を模したもので、マホガニーの厚板を台座にして、いかにも大事そうに飾られていた。その台座には金の銘板が取り付けられていたが、私の位置からでは文字を上手く読み取ることができない。

「あなたが目を留めたのは、バイアグラ広告のペン立ての方だったわね。でも、今は女性器の石膏標本にとても興味を示しているわ」
確かに私は石膏で形作られているその標本模型の完成度に感心していた。
実に良くできている――異様に大きな陰核包皮と陰裂から大きくはみだしている小陰唇の形状や皺の寄り具合など、隅から隅まで本物そっくりだ。地の色が石膏の白色でなく、人肌と同じ色だったら、人体から切り出されて加工されたプラスティネーションと思ったかもしれない。
「とてもよくできています。まるで本物ようです」
思ったままのことを答えれば、また何か言われるかもしれなかったが、とりあえず、正直な感想を述べた。
「そうでしょうね」
サンダーソン先生は、なぜか上機嫌で返事をした。
「これほど見た目が本物そっくりにできている理由は、これが生身の女性から型取りされたものだからよ」
「そのようなもの、いったい、どこで手に入れたのですか？」
私は、驚いて聞き返した。
「私が自分の患者から型取りしたものよ。私はね、彼女の外性器を診察するたびに、そのとても明瞭な女性解剖学的な特徴に感嘆したものよ。それでね、歯科で使用するアルギン酸塩を入手して型取りしてみたの。そして、それに石膏を流し込んでみたら、予想していた以上に上手くできあがったわ」
「歯科医の真似事などなさるなんて……」
私は、心底呆れかえってサンダーソン先生を見つめ返した。
名誉も立場もある聖ジョセフ病院の婦人科部長ともうあろう方が個人的な趣味で、このような際物を造っていたなどと他の医師や看護師たちに知れたら、どうなさるつもりなのだろうか？
「あなたは、道楽だと思うかもしれないけど、これはこれで、とても役立つ教材なのよ――それに、ただの石膏標本にもかかわらず、

これは確かにあなたの興味を引いたわ。あなたの心が、今、この瞬間にも性行為への衝動によって蝕まれていることを確かに証明しているわ」
「そ、そのようなことはありません……」
サンダーソン先生は、とんでもないことを言いだした。確かに石膏標本の出来具合には感嘆したけれど、べつにそれは性的な心理からではない。純粋に造形過程に興味を持っただけだ。
「いいえ、間違いないわ。私に何度も言わせないでちょうだい。これまで、あなたが繰り返してきた奔放な性行為は、あなたたちの医学研修を、そして、ここ、聖ジョセフ病院での私たちの業務を大きく妨げているわ。――同僚や患者たちを口説くことが、あなたの仕事ではないわ。あなたの振る舞いは、この病院を著しく蝕んでいるわ」
白髪交じりのブロンドを掻き揚げて嘆息するサンダーソン先生に対して、私は何の言い訳もできなかった。
「申し訳ありません……」
私には、その一言しか言葉がなかった。
「私は、あなたに対して、どのように対処すればよいか、もうわからなくなったのよ。ジョージー、私はね、あなたの才能を高く評価して、その可能性を認めているの。だからこそ、これまで、数々の素行不良にもかかわらず、あなたを医学研修に留めてきたわ。それにね、私は、あなたのお母さまをとても評価しているわ。彼女は、私が受け持った中でも最高の研修医だったわ。そして、今、彼女の娘であるあなたがここにいるわ。私が受け持った中でも最も才能があり……そして、最もやる気がない研修医として。――ジョージー、私には、あなたを医学研修から外す以外に、もう他に手段がないわ」
「お願いします、サンダーソン先生。私の母もお願いすると思います。つまりその……、私は、どうしても婦人科医学研修の課程を修了したいのです。――きっと何か方法があるはずです」
私は、サンダーソン先生の最終的な宣告に、思わず椅子から立ち

上がって懇願していた。
「いいえ、何もないわ。あなたは、これまであらゆる処罰に従ったし、その性衝動を抑えつける薬さえも服用したわ。でも、そのどれも効き目はなかったでしょ。もはや、あなたを医学研修から外すこと以外、どんな選択肢もあり得ないわ」
「サンダーソン先生、きっと何かあるはずです。私は何でもします。たとえば留年してでも……」
私の『留年』という言葉に対し、サンダーソン先生は体をわずかに震わせて、恐れおののくように薄緑色の目を大きく見開く。
「留年？　とんでもないわ。どうして、別の研修クラスまで、あなたの毒牙に曝さなければならないの？　あなたは今以上に楽しむことができるかもしれないけど、他の者たちは大迷惑よ。そんなこと許せるはずがないでしょう」
今の『留年』発言は藪蛇だったようだ。でも、おかげで、私がサンダーソン先生からまったく信用されていないと確信することができた。あとは、もう必死にお願いする以外に手段はない。そして、私の誠意を信じてもらうしかない。
「サンダーソン先生、私は二度と過ちを犯しません。本当です。何でも言ってください。どんなことでもします……」
「今さら、そんな懇願をするくらいなら、どうして、もっと真面目にしていなかったの？　ともかく、今度、あなたのふしだらな行いを見つけたら、問答無用で医学研修から外しますからね」
私は安堵した。とりあえずは、今の医学研修から外されることは避けられた。あとは、どのような処罰が私に下されるかだけだ。
「それで、私への処罰はどうなりますか？」
サンダーソン先生は、本当に困ったような顔をして、私の処罰について話し始めた。
「正直なところ、あなたへの処罰についてはとても悩んでいるわ。しばらく考えさせてもらっていいかしら。考えがまとまったら、あなたに処罰を与えることにするわ。でも、あなたが婦人科医学研修

の課程に留まるつもりなら、どんなに厳しい処罰でも受け入れる覚悟が必要よ」
「ええ、大丈夫です」
これまで、それなりに厳しい処罰を受けてきた私は、自信満々で答えた。
「ジョセフィーヌ・ホーカー、そんなに軽々しく同意してもいいの？　たぶん、その処罰は、あなたにとって決して軽いものではないわよ」
白髪交じりの婦人科部長は、私を真剣に見つめながら、厳しい表情を浮かべた。
「もちろんわかっています」
「わかったわ。とりあえず、４１９号室に自分の荷物を運びなさい。今後、あなたは他の研修医たちのそばで寝起きしてはなりません」
四階の部屋？　確かに四階には誰も寄宿していない。でも、それは……。
「４１９号室ですか？　昨年以来、四階は閉め切られていますが……」
「ええ。フロアー全体が閉鎖されていて電源も切られているわ。でも、四階には配電室があって、その隣の部屋だけは電気を使うことができるわ。快適に過ごせるよう、看護助手に整えさせますから、安心なさい」
サンダーソン先生からの説教が終わった。
私は、なんとか医学研修に留まれるチャンスを掴んだ。あとは、彼女が私への処罰を決め、それを私が受ければ、すべては丸く収まるのだ。
「ありがとうございます、先生。私は、必ず立ち直ってみせます」
しかし、サンダーソン先生は首を横に振りながら、そっと呟く。
「本当かしらね？　私、もうあなたの言うことを素直に信じることができないわ」

第三話　４１９号室にて――臨床実習前

私が自分一人だけで四階のフロアーで寝起きする『夜間謹慎』状態にされてから四日が過ぎた。
私に与えられた４１９号室は、ひと昔は病室として使われていたらしく、殺風景な部屋の雰囲気は、寮室というよりは遺体安置室に近かった。
本来は木目を見ることができたはずの天然木の板壁や天井板は木の温もりを奪うようにペンキで白く塗りつぶされていたし、カーペットで覆われているはずの床は、反対に浅黒く変色した板張りが剥きだしのままだった。
また、備え付けの家具も部屋の中央に通常の寝台よりも大きめの病院ベッド、入り口正面の窓際に簡素な木製の机と椅子のセット、そして、右の壁際に仮に設置されたと思われる古いスチール製のクローゼットがあるだけだった。
この部屋の中で、唯一、生活感を漂わせているものが左の壁際の板床に無造作に直置きした大小三つの段ボール箱だった。その中には、私の研修用の教本や資料、私物や着替えなどが詰め込まれている。
毎日寝ている病院ベッドは、白いシーツそこ掛けられていたが、クッションはほとんど入っておらず、とても固い寝心地だったが、それにも慣れ始めていた。ただ、ベッドの両サイドに立てられたポールとその付属物がやたらと気にかかって仕方がなかった。
それは、向きを変えることができる逆Ｌ字型の金属製ポールで、先端部からあぶみが吊り下げられていた――もともとは、出産用か婦人科検診用のベッドとして使われていたものかもしれないが、私は、このあぶみを見る度に、自分の足がそれに乗せられている場面を想像してしまい、気分が異様に昂揚するのを止めることができな

いでいた。
私は、そのムラムラした気持ちを必死に抑えて、この四日間、ずっと自分自身に触れずに過ごしていた——今の私にとって、ステファニーとの逢瀬で感じたオルガズムが最後のものだった。だが、それもそろそろ限界が近づきつつあるようだ。

性的に成熟しきっている肉体は疼き始めていて、その精神も性的な快楽を求めて悲鳴を上げていた。もう二度と過ちは犯さないとサンダーソン先生に約束し、自分自身に対しても身を慎むと心に誓ったのだからと思い、なんとか耐え忍んでいたが、私の中に潜む性欲という名の猛獣を縛る鎖は、もう断ち切られる寸前だったのだ。

そんな不安定な精神状態に陥り始めていた時、開けっ放しというか、壊れていて完全に閉まらないドアを形式的に軽くノックする音が響いた。そして、それにサンダーソン先生の落ちついたアルトが続く。

「ごきげんよう。具合は、どうかしら？」
「ごきげんよう、サンダーソン先生。どうぞ、お入りください」

部屋の中に入ってきたサンダーソン先生は、椅子に腰掛けている私ときちんとベッドメイキングされている病院ベッドへ交互に視線を走らせてから、ゆっくりと話しだす。

「あなたがきちんと服を着ているなんて、とても信じられないわ。申し訳ないけど、私は、あなたがあられもない姿でベッドの中にいるのではないかと心配していたのよ」

危なかった——本当に危ういところだった。サンダーソン先生がやってくるのがもう少し遅かったら、私はまたもや過ちを犯しているところだった。さらにその現場を先生に押さえられ、何かもお終いにしていたかもしれなかった。

「私は、あの話し合い以来、先生との約束を守って過ごしています」

内心の動揺などおくびにも出さず、私は即座に答える。

「だからといって、あなたが処罰を免れることができるとは思わないでね。たとえ、今、あなたが身を慎んで過ごしているとしても、

以前に犯した罪は消えていないわ。それは必ず償わなければならないことよ」
聖ジョセフ病院の婦人科部長は、老成した英知の輝きを深翠色の瞳にきらめかせ、口にする言葉を慎重に選びながら穏やかに話す。
「でも、あなたの生活態度がとても良い状態であることと、これからのことを真剣に考えている姿を見ることができて、私はとても嬉しいわ。ここ四日間の研修態度も非常によかったし……。これでようやく、あなたのお母さまにも顔向けできるわ」
「ありがとうございます……。これも先生のご指導の賜物です」
心の底からの感謝の意を真摯に伝える。
「今日は、あなたの神経を静めるために、これを持ってきたわ。あなたが性行為を控えているのなら、あなたの体は少し過敏になっているはずよ。人間の体は新しい生活様式に順応するのに時間を要するわ――たとえ、すでに、あなたの心が順応していたとしてもね……」
そう言いながらサンダーソン先生は、白衣のポケットからちょうど掌に乗るくらいのパッケージを取り出した。
そのあまりのタイミングの良さに、私は、この老婦人の非凡な洞察力に対して畏敬の念を覚えた。また、その思いやりある心遣いにも感謝の気持ちでいっぱいになった。
「ありがとうございます。ちょうど集中力が鈍り始めていたところです。それで、それは何ですか？」
「何も心配はいらないわ。ただの精神安定薬よ」
サンダーソン先生はそう言って、やさしく微笑みながら精神安定薬のパッケージを私の手にそっと握らせる。
「明日は、いよいよ婦人科医学研修の最終課程よ。研修の内容は臨床実習だから、今晩は、これでぐっすりと寝て、明日に備えなさい」
「はい、ありがとうございます」
「それでは、ごきげんよう」
部屋を出ていくサンダーソン先生を見送った私は、精神安定薬の

パッケージ表面に目を向けた。それは先生のデスクの上に置かれていたペン立てで宣伝されていたものだった。パッケージに印刷されている仕様を確認すると、成人の一回あたりの服用量は三粒だった。

私は、錠剤を三粒だけ取り出して掌の上に乗せた。その白い光沢を放つ丸い粒を見つめながら、必ず立ち直ってみせると、改めて自分自身に言い聞かせた。そして、それらを一気に飲み下した。

第四話　手術室にて――臨床実習開始

私が目覚めたとき、なぜか意識が朦朧としていた。

目の焦点がまったく定まらず、全体的に薄暗い――まるで明るい光が遥か彼方にあるような感じだった。

今、私が思い出せる最後の光景は、自分の掌に乗せた精神安定薬の白い錠剤だった。それを服用したかどうかさえ、はっきりとした記憶がない。

ぼんやりとしているうちに、しだいにサンダーソン先生の声が聞き取れるようになってきた。彼女は、幾人もの相手に対して話しかけているようだった。

サンダーソン先生の講義!?　――そう、それは間違いなく研修時の講義口調だった。

目の焦点が定まったとき、視線の先でサンダーソン先生が話をしている姿を確認することができた。でも、視界の端はまだ霞んでいて、周りは良く見えない。

どうやら、間違いなくサンダーソン先生の講義中のようだ。

でも、今まで私は眠っていた――いったい、どうやって、先生の講義を受けていたのだろうか？　そのうえ、目覚めたばかりの私は、ベッドの上で横たわっていた。これでは講義の受けようもない……。

しだいに意識がはっきりしてくると、自分が一糸纏わぬ全裸にされて、病院ベッドの上に仰向けに寝かされていることがわかった。

さらに両足はあぶみに吊されて、大きく広げさせられていた。

吊された足をあぶみから下ろそうとしたところで、私は両方の脛と太股が革製のベルトで固縛されていることに気づいた。それを外そうと思って手を動かさそうとしたら、両手首と両腕も同じように革製ベルトで病院ベッド上に留められていた。また、これらよりもやや太めのベルトによって腰回りの方も完全に固定されていて、下

半身全体がまったく動かせないようになっていた。
　ここ四日間、私は、ずっとこの病院ベッドで寝ていたが、あぶみ以外に、このような仕掛けが隠されていたことにぜんぜん気づいていなかった。おそらくシーツを被さられていたからだろう――今は単に無機質な黒いレーザー地を晒していた。
　そして、霞んでいた視界が完全に開けたとき、私は、白っぽい部屋で明るいライトに照らされて、サンダーソン先生を始めとする青い手術衣の集団に囲まれていることを認識した。
　私は、すぐ目の前の手術用マスクに隠された顔を見た。そのダークブラウンの瞳は、よく知っている人物だ――そう、そこにいたのはステファニーだった。そして、その青い手術衣の集団は、私と同じ婦人科医学研修の課程に属する研修医たち――私の同期生たちだった。サンダーソン先生自身も手術用マスクを除いて同じ手術衣を着ていた。
　今、私は白いタイル貼りの手術室――視界がはっきりしたときに目に入ったライトは天井に設置された無影灯だった――で、素っ裸にされたうえに、４１９号室にあった病院ベッドの上で大股開きにされて、身動きが取れないように拘束されたまま、サンダーソン先生と同期生たちに取り囲まれていたのだ。
　どうして、自分がこのような状態でいるのかがまったく理解できなかったが、どうやら、今は婦人科医学研修の最終課程の真っ最中らしい――私は睡眠薬で丸一日眠らされていたようだ。未だに頭の芯に残る重い感覚がそれを如実に証明していた。
「私たちの患者が目覚めたようです。……さて、これで研修医全員が揃ったので、あなたたちの婦人科医学研修の最終課程を始めることにします。そして、最終課程の研修内容は、実際の患者に治療を施す臨床実習です」
　私がサンダーソン先生を見上げていると、彼女も振り向いて私を見つめてきた。互いの視線が静かに絡み合う。
　私は、困惑した。

猿轡を嚙まされているわけではないので、サンダーソン先生に抗議しようと思えば、話しかけることはできる。でも、私は沈黙を守らざるを得なかった。この辱めが、私への処罰であることが今の一瞬の目配せで理解できたから……。

私が、この婦人科医学研修の臨床実習で被験者を務めること――同期生たちの目の前に自分の外性器を晒して何らかの実習を供されるという、この尋常ではない屈辱に耐えることこそが、私に下されたサンダーソン先生の処罰なのだろう。

私は、今、この場にいて、なおかつ、何も問題のない状態だった――私は、まだ医学研修の課程にいる。そして、その最終課程を受け始めている――まさに私は、これ以上にない妥協によって解決された立場にいるのだ。

「ジョージー、婦人科医学研修の最終課程として行う臨床実習を最後まで受け続ける覚悟はできていますか？」

このとき、私は自分が手術室にいることと周りにいる同期生たち全員が手術衣を着ていることの重大性をあまり理解していなかった。だから、深く考えずに返事をしてしまった。

「はい、大丈夫です。サンダーソン先生」

私を囲む研修医たちは、当惑した様子で互いに目を向け合っている。でも、誰も言葉を発していない――それは奇妙な沈黙だった。ふだん、私たちは授業中によく私語を交わしていたから。

私は、自分自身に何が起ころうとしているかまったくわからない状況にもかかわらず、彼らを何らかの方法で安心させなければならないように感じられた。

「サンダーソン先生、私にも手術用マスクを付けていただけますか？」

私は、軽い調子で言った。

「もちろんです、ジョージー。あなたのために、ちょうどここに、それを持ってきています」

サンダーソン先生が、私の顔の上に手術用マスクをそっと被せた

ので、私の同期生たちは、より当惑したような表情になった。
一方、サンダーソン先生は、より確信を持って自信に満ちた顔つきになった。彼女は、私がこれを自分に対する処罰であると認識したことを、そして、私が医学研修の最終課程を無事に修了したいと考えたなら、協力しないわけにはいかないと自覚していることを完全に確信していた。
結局、同期生たちの緊張をほぐすことはできなかったが、落ちつきを取り戻させることだけはできたようだった。
とくに男性研修医たちは、先ほどまでのどこか硬い感じがする表情から、ふだんどおりの軽いノリを思わせる雰囲気を取り戻している。そして、彼らは、まるで少年のように好奇心旺盛な顔つきをして、私の体のあちらこちらに熱い視線を泳がせていた。彼らの瞳に奥に医学的な関心だけでなく、性的な関心も見え隠れしているように思えるのは、私の自意識過剰だろうか。
「さて、本日の臨床実習の患者ですが、ジョセフィーヌ・ホーカー研修医が自分の性欲異常亢進症を治療するにあたり、臨床実習の被験者として名乗り出てくれました。全員、ジョージーの英断と献身に感謝するように」
この恥辱に満ちた処罰を受け入れるという、私の意志を密かに確認し終えたサンダーソン先生は、婦人科医学研修の指導医として、これから行う臨床実習の内容を研修医たちに説明し始めた。
「――そして、今日の臨床実習は、あなた方のうち、何人かの者が苦手と感じている外科手術です。万が一、あなた方の中で退出する必要性が生じた者は、躊躇なく退出してもらってかまいません」
――外科手術!?
婦人科医学研修の最終課程――臨床実習が外科手術というのは初めて聞く話だった。確かに今いる場所は手術室に違いないし、全員が手術衣を着てもいたが、まさか本当に外科手術が私に対して行われるとは、今の今でまったく思っていなかった。
そもそも性欲異常亢進症の治療としての外科手術とはいったい何

なんだろうか？　サンダーソン先生は、いったい私に何をするつもりなのだろうか！？　自分の外性器に対して――今の拘束されている状態から考えて、それ以外には考えられなかった――外科的に何を施されるかわからない不安から、私の心臓は早鐘のように打ち始めていた。

第五話　手術室にて——手術開始前

「私たちは、婦人科患者の多くが外科手術に対して不安になるだろうことを知っています。しかし、私たちは患者のために彼女たちを指導し、治療としての外科手術を行わなければならないという事実は変わりません」
　同期生たちは、サンダーソン先生の講義に頷いていた。私も湧き上がる不安を押し殺して、一言も聞き漏らすまいと先生の講義に耳を傾けていた。
「ジョージー、あなたが治療のために受ける外科手術は、事前に話し合ったとおり、短時間で終わる単純なものです。麻酔も局部麻酔ですから、あなたも他の研修医たちと同じように外科手術の一部始終を十分に観察することができます。私は、そのための準備もしておきましたから何も心配する必要はありません」
　私は黙ったまま、その説明を聞いていた。もちろん、事前の話し合いなどは一切なかった。気がついたときには、このベッドごと手術室に運ばれていたのだから……。ただ、今のサンダーソン先生の説明から外科手術といっても、それほど大げさなものではないらしいということが理解できたので、少し気分が落ちついてきた。
「まず手術を始める前に、アルギン酸塩を使って、この患者の外性器の型取り作業を行います。この患者の外性器は、その形状がとてもはっきりしています。とくに陰核がどれほど大きいか、よく観察してみるといいでしょう。これには多少なりとも遺伝的なものがあるかもしれませんが、これだけの大きさになるには、間違いなく低年齢から行われていた常習的な刺激に起因しています。勃起性組織を繰り返し大きく伸張させれば、それはしだいに増大します。ジェリー、アルギン酸塩を用意しなさい。その大きな調合カップを使って——それと、冷たい水を——準備には時間がかかります」

サンダーソン先生は、みなに指示を出しながら私の陰核を指で擦り始めた。このとき、私は初めて自分の外性器が剃毛を施されていることに気づいた。
「陰核が充血していく過程をよく観察しなさい――このように少しずつ充血していきます……。見なさい、非常に大きく勃起しました。この陰核亀頭は、直径で十ミリよりもだいぶ大きく、また、少なく見ても十五ミリ以上の長さがあります。ほとんどの女性は、このサイズの半分もあれば、極めて幸運です。陰核亀頭は陰部神経終末が密集しており、極めて神経が敏感な性感帯です。そして、性感を刺激されることにより血液の供給が増大し、このように膨張します。今、私たちが観察したように、こうした器官の膨張によってもたらされる刺激の高まりは、患者の集中力を本当に散漫にします。――ジェリー、アルギン酸塩は、どんな具合ですか？」
　私の陰核は、これまでになかったほど大きく膨らんだ。作業が進められている間、快楽のない刺激によって充血させられ、さらに大きくなることを熱望している私の器官は、そのまま放置された。
「準備できています、先生」
「ありがとう……。デイビッド、アルギン酸塩を保持するために、この楔型のボードを患者の太股に押し付けなさい。それで、ここに、私がアルギン酸塩を注ぎます」
　アルギン酸塩の冷たい感触は、若干あった心地よい感覚のすべてを瞬く間に葬りさった。私の外陰部に付着したアルギン酸塩には性的に感じるものは何もなかった。そして、それは徐々に痛み始めた。私で進行しつつある事態はとても辛いものだった。
「さあ、ジェリー、石膏を混ぜ始めなさい。アルギン酸塩鋳型は驚くほど細部まで写し取ることができます――もっとよく混ぜ合わせて。普通なら陰毛ごと写し取ることになりますが、患者自身による細心の剃毛作業のおかげで、私たちは無毛の標本を手に入れることができます。さらに付け加えるならば、アルギン酸塩は、それがセットされた後、急激に硬化し始めます――ほら、もう堅くなってい

ます。これから鋳型を剥がすので、よく観察しなさい――患者の外性器の細部をすべて写し取っているはずです。エリザベス、麻酔薬を注射する準備をしなさい。これから患者の外性器に局所麻酔をかけます。あなたは注射を終えたらならば、患者にカテーテルを挿入することができます。患者がカテーテル挿入で苦痛を感じないよう、挿入前に麻酔薬が効いているかどうか、しっかり確認しなさい。ゴードン、ヨウ素消毒液を準備しなさい。手術をする前に患者の外性器を殺菌しなければなりません。シンディー、あなたがやりなさい。そして、殺菌が終わったら、大陰唇を圧搾鉗子で挟んで陰門を広げなさい。――では、準備を始めなさい」

サンダーソン先生が鋳型に石膏を注いでいる間、指示を受けた研修医たちは入り替わり立ち替わり、私の股間でそれぞれの仕事を進めた。彼らは、ピットに入ったレーシングカーに取り付いているメカニックチームのようだった。

やがて、私の手術準備は完全に終えられた。

「私たちは、今、外科手術を行う前に患者の外性器から鋳型を取りました。これにより、後世の研修医たちのために、この外性器の完全な石膏標本を完成させることができます。私は、本日行う性欲異常亢進症の根本的な治療――陰核切除術の性質から、それを施術する前に、このような特別な作業を行いました」

――陰核切除術!?

サンダーソン先生が口にした術式名を聞いた瞬間、私は全身から血の気が引く思いがした。実際、顔色も変わっていたかもしれない。今にも震えだしそうな体を必死になって抑えこむ。

これから行われる臨床実習で、私が受けることになる外科手術が陰核切除術であるなどとは、にわかに信じられなかった――いや、絶対に信じたくはなかった。しかし、それはまぎれもなく現実だった。今、自分が辺り構わずに泣き叫びださないのが不思議なくらいだった。

もちろん、罰として臨床実習の被験者を務めるわけだから、私に

施される処置が相当厳しいものだろうと自分なりに予想はしていた――が、まさかこれほど苛酷で容赦ないものになるとは夢にも思っていなかったのだ。いきなり陰核切除術を行うだなんて、余りと言えばあんまりな仕打ちだった。

陰核は女性の快楽神経の中枢であり、それへの刺激なくして満足な性感を得ることはできない。オルガズムに達するためになくてはならない存在だ。それを切除されるということは、日常的なセックスライフを失うに等しい――まだ年若い私にとっては、これはとてつもなく残酷な処罰だ。

さらに臨床実習で陰核切除術を受けるということは、研修医たちの手によって陰核を摘出されることを意味する。それは同期生たちに私の外性器の形状を余すことなく晒すだけではなく、女性にとって最も重要な性感器官を実質的に生体解剖されるということと同義だった――よく見知っている者たちの手で外性器を切り開かれて陰核を体外に引き出され、その解剖学的構造を隅から隅まで観察されるのだ。

そんなふうに自分の外性器を手術される情景をリアルに思い浮かべてしまった私は、突然、言い知れぬ恐怖感と心の底から湧き上がってくる絶望感、そして、筆舌に尽くしがたい屈辱感に襲われ、心が押し潰されそうになった。私は、この悪夢のような状況から何としても抜け出さなければと固く決意した。

このあまりにも残酷な仕打ちを決定したサンダーソン先生に対して、私が抗議の声をあげようとして見上げた先には、有無をも言わせない圧倒的な威圧感を持って私の方を見返す婦人科部長の冷徹な視線があった。それを目にした途端、たちまち私の決意は砕け散った――彼女の私に対する怒りは、私が抗うことができないほど深いものだったのだ……。

私はサンダーソン先生の気性を見くびっていたのだ。なぜ、あの時の怒りに満ちた氷のような眼差しを忘れてしまったのだろう。あれを覚えてさえいれば、昔気質の老婦人がこのような厳しい処罰を

下すであろうことは十分に予想できたはずだ。それなのに、どんな処罰でも受け入れるなどと安易に答えてしまった――完全に自業自得だった。
　そんなことをいろいろと思い悩んでいる私をよそに、サンダーソン先生は何事もないように淡々と講義を続けていく。
「私たちは患者の性感を刺激する組織のすべてを摘出して、陰核全体を切除します。陰核海綿体を摘出した後、出血することがないよう、私たちは左右に二本ずつある動脈を静脈に繋ぎます。もちろん、幻の苦痛を最小限にするために、切り離した神経を適切に処置することも重要です。ただし、このように神経が豊富な部位では大変むずかしいことです……」
　それにしても、私は同期生たちによって陰核を切除される手術を本当にされなければならないのだろうか？　それが私の婦人科医学研修の最終課程だというのだろうか？　私が婦人科医学研修課程を修了するために、それほどまで大きな犠牲を払わなければならないものなのだろうか！？
　陰核切除術は、サンダーソン先生が言うように性欲異常亢進症の根本的な治療としては最も確実な手法だろう。患者が外性器の快楽中枢である陰核を奪われれば、どんなに性欲を感じていたとしてもオルガズムを得ることは著しく困難となるからだ。しかも、それは不可逆的な手法であり、一度、陰核を切除してしまえば、二度と元には戻せない――美容整形で見た目を取り戻せたとしても、それ本来の機能まで回復させることは、どのような名医をもってしても不可能なことなのだ。
　そして、このような根治的な手術、本来ならば、私が受けるようなものではなかった――私は、根本的な治療を必要とするような性欲異常亢進症など患ってはいないのだから。それにもかかわらず、この手術が施されるということは、処罰としての意味合いだけではなく、私が女性と性的関係を結ぶことを戒めるという目的もあるのだろう。

陰核を失うようなことになれば、私は女性との性交渉でオルガズムを得ることを諦めなければならないだろう。少なくとも、これまでのように数多くの女性たちと享楽的なセックスライフをすごすことは不可能となる。それはすなわち、私の奔放な女性遍歴にも終止符が打たれることを意味する——サンダーソン先生の意図もそのあたりにあるのだろう。

「——OK。カテーテルは正しく挿入されています。また、局所麻酔薬は効果を現わしているようです。患者は、これから行われるすべてを見て、感じることになりますが、苦痛は最小限であるべきです。ただし、私たちが患者の陰核神経を切り離す際には激しい苦痛を感じるかもしれません」

今や、手術用マスクは、私の顔の強張りや虚ろな目の動きを隠すことはできなかった。

「ジョージー、恐れを感じることに何ら問題はありません。このような手術を受ける決心をすることと実際にそれを受けることとは異なります。多少の恐怖や不安を持つのは当然のことです。ですが、あなたが、どうして、このような決心をしたかをよく思い出しなさい。そして、あなたの筋肉を緊張させないようにしなさい——それはひとえに手術をより困難にします」

私を取り囲む同期生たちの表情は困惑から驚愕へと変わった。彼ら全員は、これを私が準備したこと——これは私が望んでするものであると信じたようだ。

——違う！！

私は絶叫して訴えようとした。

しかし、サンダーソン先生の険しい表情が私を押し止めた——これは私の処罰だった。私は彼女が決定したことをすべて受け入れることに同意した——そう、私は前日にそう誓っていた。私は、これを自分で選択をしたのだ——このようなことは決して受け入れることができないと考えたとしても、最終的には、この選択を選ばざるを得なかっただろう。

「ジョージー、あなたも婦人科医学研修の最終課程として、これから行われる臨床実習——外科手術をよく観察しなければなりません」
　サンダーソン先生は、私が自分の気持ちに折り合いをつけようと葛藤しているのを知ってか知らずか、そんなことを言いながら、私の頭の横に小型のテレビモニターを置いた。そして、少し離れた所で何か操作する。
　すると、ブーンという電源が入る音とともにモニターの画面が明るくなる。最初のうちは、ぐるぐると画像が目まぐるしく入れ替わっていたが、病院用ベッドの上に小さな三脚が据えられてカメラが固定されると、それから徐々にピントが合わさり、その画面の中には無毛の滑らかな白い丘と艶やかなピンクに彩られた谷間がくっきりと映しだされた。
　じつは後で知ったことだが、術野を確保できない研修医たちのためにもう一回り大きなモニターが、たった今、サンダーソン先生がいた辺りに置かれていたらしい。先生はその画面を見ながらカメラの焦点を合わせていたのだ。
　すなわち、婦人科医学研修の指導医として、サンダーソン先生が私のために事前にわざわざ準備してくれていたというのが、このビデオモニターと超小型のビデオカメラのセットだったのだ。確かにこれなら寝ながらにして、自分に行われる外科手術の模様を観察することができる。
　不特定多数を相手に不純な交遊を何度となく繰り返してきた私だったが、意外にも自分自身で己の『もの』をこれほど間近で見たことはなかった——たとえ鏡を使ったとしてもこのようにはっきりと見ることはできないだろう。
　高解像度の画面いっぱいにクローズアップされた私の外性器は、左右の肉厚の大陰唇を圧搾鉗子で挟まれて大きく広げられていた。上方の大きめの陰核包皮からその下のやや開き気味の小陰唇まで完全に晒けだされていて、今や、いつでも手術を受けられる状態だった——まさに俎板の鯉だった。

第六話　手術室にて――手術開始（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

第六話　手術室にて――手術開始

「それでは、これより臨床実習の外科手術を開始します」
　そう宣言すると、サンダーソン先生は、右手で外科用鋏を取り上げた。左手には長い外科用鉗子が握られている。
「私は、まず陰核の周囲に切り込みを作ることから始めます――カテーテルがどれほど重要かを確認しなさい。手術部位は尿道に近いです。――私は陰核に接する小陰唇の一部も切除する予定です。陰核亀頭が独立していたとしても、神経は陰核に接する小陰唇の一番上にも広がっています。ただし、私は患者の小陰唇を適切に保つため、少し時代遅れの風変わりな接着剤を使う予定です。ゴードン、用意しなさい――そこにあります……。また、この患者で、私は陰核包皮をすべて取り去る予定です――この大きな陰核で陰核体や陰核脚を摘出するためには、とても大きい切開部を必要とします」
　小型モニターに映しだされたサンダーソン先生の指先は、とても器用に働いて巧みな鋏使いを披露する――外科用鋏と外科用鉗子を使って陰核周辺部を素早く切り進んでいく。あっという間に陰核包皮が切り取られ、血まみれになった亀頭部が完全に露呈した。
　血の筋が会陰を下って流れ始めたとき、剥きだしにされた陰核が急激に充血し始める。なんと、私は感じていた――モニターの中の陰核は、自分のものではないようにまったく無感覚だった。しかし、それにもかかわらず、とても大きく勃起しつつある。私は、その映像を信じることができなかった。
　サンダーソン先生は右手に握る鋏を外科用メスに持ち替えると、左手の親指と人差し指で陰核亀頭を直に摘んで引っぱり上げた。それから、長く引き伸ばされた薄桃色の肉柱の根本に鋭利なメスの切っ先をあてがうと、熟練したメス捌きでグルリと環状に切り進んだ。たちまち陰核亀頭が体表から切り離される。

「現状は手術を行うにあたって、少々、むずかしい状況です。患者は性的に非常に興奮した状態にあります。そのため、陰核海綿体が充血し、陰核全体が大きく膨らんだ状態にあります。陰核亀頭が勃起している状態をよく観察しなさい――内部の陰核体や陰核脚は、さらに膨らんでいるはずです。陰核亀頭は体表からは切り離されましたが、陰核体は内部ではまだ繋がっています。どのような状態で繋がっているか確認してみます。ジェフリー、あなたは好奇心が強そうです。ここに来て、それに触れてみなさい」

サンダーソン先生の細長い指先に代わって、太くてゴツゴツした指が私の陰核を摘んだ。真っ赤に膨らんでいる亀頭部は、ジェフリーの親指の先端よりも大きくなっていて、彼は、それをこわごわと、しかし、無遠慮にグルグルと動かした。

「開創器を使って切開部を広げます――シンディー、あなたが広げなさい」

開創器を取り上げたシンディーは、まさに必要最小限だけ切開部を広げた――私たちは、二人とも切開部を可能な限り広げない方が手術後の治癒が、より良好だということを理解していた。

「さあ、ジェフリー、それを外へ引っぱりなさい」

ジェフリーは、私の陰核を上方に向かって、おそるおそる引っぱり始めた。同時に、サンダーソン先生は外科用メスを切開部へ差し込むと、白膜に包まれた陰核体を周囲の組織から慎重に剥離していく。

「ジェフリー、もっと強く引っぱって――そう。そんな感じです」

私は、神経が麻痺しているはずの下腹部の体内で、何かが引っ張られるような、あるいは引き攣るような何とも形容しがたい奇妙な感覚に襲われる。そして、モニター画面に映っているサンダーソン先生のメスが器官の周囲を切り進むにしたがって、陰核体はその自由度を増し、体内に埋まっていた部分が開創器で広げられた切開部より少しずつ、その姿を現してくる。

「指を放しなさい、ジェフリー。私が、今、それを保持しています」

サンダーソン先生が、ジェフリーによって外に引っぱり出された陰核体をステンレス製の鉗子で確保しながら告げると、彼は名残惜しそうにそれを手放した。それに気づいた先生が苦笑いを浮かべながら尋ねた。
「ジェフリー、それを引っぱってみて、どのように感じましたか？」
「一見、簡単に取れそうでしたが、実際にはとてもしっかりと根が張っているようでした」
実際のジェフリーの感想が、どのようなものだったか計り知ることはできないが、彼は至極真っ当な模範解答で返した。
「ジェフリー、あなたの言うとおりです。陰核は陰核脚だけでなく、陰核提靭帯によっても恥骨と繋がっています。それらを確実に切らなければ、陰核のすべてを摘出することはできません」
サンダーソン先生は、そんなふうに解説すると、鉗子でがっちりと挟み込んだ陰核体を上方に向かって思いっきり引っぱり上げた。すると、それはズルッという感じで外に引きずり出され、恥骨に繋がる陰核堤靭帯を露わにした。さらに切開部の血溜まりの中に、二又に分かれた陰核脚もほんの僅かだが露出した。
「さて、これが陰核体です。そして、そこから正中線へ伸びているこれが陰核提靭帯です。どのように繋がっているかをよく見てみなさい」
そのあからさまにされた陰核体を研修医たちに観察させながら、サンダーソン先生は説明を続ける。
「――この陰核堤靭帯には、陰核神経は通っていないので、陰核と接する部分で単純に切断しても、なんら問題はありません」
私もモニターに映しだされたそれを観察する。
局部麻酔が効いた以降、私はその部分で何も感じることができなかったので、実際に自分の外性器を手術されているという気がしなかったし、モニター内のそれが自分の『もの』であるという実感もまた持てないでいた。
「デイビッド、あなたに最初の術者としての栄誉を与えましょう。

陰核提靭帯を切り離してみなさい」
一通りの説明を終えたサンダーソン先生は、デイビッドに対して、実際に手術を行うよう命じた。やや神経質気味でプラモデル作りが趣味の彼は、指先が異様に器用だった——手術手技は同期生たちの中では、おそらく私と並ぶほどの技量を持っているはずだ。手術実習の一番手には、もってこいの人選と言えた。
「はい、先生」
デイビッドはそう答えて、外科用鋏と鉗子を取り上げた。それから、鉗子で陰核と恥骨を繋いでいる細い繊維組織を少しだけ引っぱり上げて、鋏の刃先をより陰核体に近いところにあてがった。
「——そう。そこです、デイビッド」
サンダーソン先生の指示に従ってデイビッドが鋏を閉じ合わせると、鋭い刃先に挟まれた陰核提靭帯は鈍い音を立てて、あっけなく切断されてしまう。すかさず、先生は右手に持つ外科用メスを切開部へ差し込み、左手の鉗子に引き上げながら、左右の陰核脚の付け根へと刃先を沈めていく。
「陰核脚は筋組織である坐骨海綿体筋によって被われています。したがって、陰核脚を摘出するためには、このように深い部分まで切り進む必要があります」
恥骨上部へと繋がる靭帯を切り離され、さらに恥骨弓に伸びていた陰核脚をも完全に剥出され、その自由度を大幅に増した陰核体は、先生の持つ鉗子に引かれて、ついにその全貌を研修医たち全員の前に晒けだすこととなった。
「これら陰核体と陰核脚のすべてが陰核海綿体からなる勃起性組織です。性的に興奮状態になると、著しく充血し、このように大きく膨らみます。したがって、動脈と静脈、そして、陰核神経束を内包する陰核体の摘出には細心の注意が必要とされます」
私の性的な中枢器官のすべて——本来ならば体内の深い部分で恥骨に繋がっているはずの二本の陰核脚をも含め、そのほとんどを体外へと抜き出したサンダーソン先生は、研修医たちに向かって座学

授業の時と同じ口調で淡々と説明し続ける。
「陰核海綿体に繋がる陰核背動脈と陰核深動脈がそれぞれ左右に確認できます――ここです。陰核脚が分岐しているところの下です。そして、同じく陰核背神経も、そこに繋がっています」
要するに、今、この瞬間、私の陰核を体に繋ぎ止めているのは、その血管と陰核神経だけということだった。そして、私の解剖された外性器から視線を離すと、サンダーソン先生は研修医たちに向き直った。
「この患者の陰核は、亀頭部から陰核脚末端部までが百五十ミリ近くあります。通常、どんなに大きな陰核でも百二十ミリくらいまでです。これは、私が今までに見た中で最も大きい陰核です。あなた方は、この患者の陰核によって、陰茎と陰核が解剖学的に、本当にどのくらい近しい関係にあるかを確認することができます。正直なところ、婦人科医でさえ、注意深く観察しなかったなら、これを陰茎切除術の標本と混同するかもしれません。――全員、よく観察してみなさい」
その言葉に従って、同期生たちが入れ替り立ち替り私の股間を覗きこんで、その全容を明らかにしている陰核全体を順番に観察していく。私もモニター越しにじっくりと眺める――モニターの映像は患部がクローズアップされているので、かえって私の方が他の研修医たちよりもずっと詳細に観察することができるのは皮肉だった。
陰核体と陰核脚は、私の体から完全に切り離され、その大部分を体外に引き出されている状態だったが、まだ血管と神経が繋がったままなので、サンダーソン先生の与える刺激に対しては敏感な反応を示していた――そのぴくぴくと痙攣するように脈打つ様は、自分のものながらも見ていてとても不気味だった。
「それでは、デイビッド。次は陰核背動脈と陰核深動脈を陰核体から切り離して、それぞれの静脈と縫合しなさい」
そのサンダーソン先生の命令に対して、デイビッドは手にしていた手術道具を外科用ハサミから外科用メスに持ち替えると、いよい

よ本格的な手術へと取りかかった。先生の方も止血鉗子を取り上げると、彼の隣に立ってアシストを務め始める。
「――ＯＫ。私は止血鉗子で動脈を締めつけます――そこです。止血鉗子の後ろを切りなさい。そう。それで、素早く血管の端を縫い合わせなさい――これは適切に仕上げるために最も良い方法です」
額に大粒の汗を張り付かせたデイビッドは真剣な面持ちで陰核海綿体より切り離した動脈と静脈を丁寧に繋ぎ合わせていく。その血管を切断して縫合するという微細な作業が二回、三回、四回と繰り返されると、先ほどまで勢いよく聳立していた陰核が塩を浴びたナメクジのように小さくなっていく――血液の供給を絶たれたために、勃起状態を保てなくなったのだ。
「先生、できました」
「よろしい、デイビッド。とてもきれいで、しっかりとした縫合です」
その誉め言葉に、デイビッドが誇らしげにはにかむ。
私も心の中で、彼に対して『グッドジョブ！　ベリーサンキュー！！』と伝える――術後の治癒のことを考えれば、じつに申し分のない手際だった。そして、さらに『ソーリー』とも――私は、彼のプラモデル作りをオタク趣味と密かに馬鹿にしていたから。

第七話　手術室にて――手術終了（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

第七話　手術室にて――手術終了

「それでは神経――陰核背神経と周辺部の末梢神経への対処に移ります。――ステファニー、どうして、そんな後ろにいるのですか？　前に出てきなさい。あなたが私の指示に従って、それをやってみなさい。まず、ここで、この装置を使って患者の末梢神経を灼きなさい」

サンダーソン先生は、そう言ってステファニーを自分の隣に招くと、先端が超極細の針状となっている半田ごてに似た器具をやや強引に握らせる。やはり、彼女も手先が器用な方で、どうやら先生は手術実習を研修医に行わせるにあたり、それなりに人選はしているようだった。

ほんの僅かの間、躊躇していたステファニーだったが、覚悟を決めたようにサンダーソン先生から手渡された神経焼灼器具の先端を開創器で広げられた切開部の中へ慎重に挿し込んでいく。

「陰核背神経から分岐している末梢神経の位置を確認しなさい。――そう、そこです。周囲の組織に触れないよう慎重に……。そうです。そのような感じで、他の部分も……」

サンダーソン先生が焼灼すべき箇所について細かく指示を与える。そして、真剣な眼差しでステファニーが器具の柄にあるスイッチを押す度に、ジーッという音がして、末梢神経の走る組織に押し当てられた先端部あたりから薄い煙が少しだけ上がるのが確認できた。

「――そう、上手くできています。それから、ここにも当てて……。そう……」

そのようにしてステファニーによる緻密な作業が機械的に何度も繰り返され、ついに陰核周辺部の末梢神経のすべてが焼灼され尽くされた。残されたは陰核体を経て亀頭部に繋がる主神経だけとなった。

「素晴らしい手際でした、ステファニー。次は陰核背神経の切断です。これを安易に切断した場合、患者に神経組織を残すことになります。それは刺激を受けた場合、苦痛もしくは快楽を引き起こすことに繋がります。その症状は、患者をとても苛立たせ、精神の不安定を招くことになるかもしれません。神経組織のすべてを完全に取り除くことにより、私たちは患者が不快な状態に陥らないようにできます。少しでも神経組織を残したならば、それは患者に苦痛と挫折感を与えることになります。――さあ、ステファニー、よく観察して――先ほど、デイビッドが陰核提靱帯と血管を切り離してみせたように、あなたも陰核背神経を切り離してみなさい」
　説明をし終えたサンダーソン先生に促されて、ステファニーは、細長い外科用鋏を右手で取り上げると、それを白っぽい神経繊維にあてがっていく。しかし、微妙に震える刃先は、いつまで経っても位置が定まらない。
　数日前に閨を共にした相手の、そして、自分自身でも愛撫した『もの』を断ち切ることに対して、彼女は明らかに躊躇いがあるようだった。あるいは怯えていると言っても差し支えない。
「先生、すみません。私では、うまくできそうにありません」
　陰核の主神経から外科用鋏を引いて、ステファニーは力なく呟いた。
「そう？　わかりました。それでは、シンディー、あなたがやってみなさい」
　サンダーソン先生は、とくに怒ったふうもなく、前列から下がっていたシンディーに声をかけた。彼女は、先月、私が関係を持った相手だ。そのときも事が発覚して、こってりと油を搾られている。
　シンディーもステファニーと同様、外科用鋏を細長い繊維状組織にあてがうところまでは行えたが、その先――陰核背神経を切断するまでは至らなかった。
「先生、私も上手く行う自信がありません」
　そのシンディーの返答に対しても、サンダーソン先生は不満の色

を見せず、後方に控えている別の女性研修医を新たに指名する。
「それでは、ジェリー、あなたがやってみなさい」
「は…、はい、先生」
ジェリーは、あからさまに震えた声で返事をした。
私は、彼女との熱い逢瀬を思い返しつつ、その性格からして、絶対にできないだろうなと、まるで他人事のように考えていた。
「わ…、私……、で…、でき……ません……」
結局、やや気弱な面を持つジェリーは、外科用鋏の刃先を開いて、術部へ持っていくことさえできなかった。
私は、なんとなくサンダーソン先生の意図が理解できた。これは、私への処罰であると同時に、私と関係を持った女性研修医たち全員に対する踏み絵でもあるのだ。彼女たちが、私のセックスライフに対して、最終的かつ決定的な終焉をもたらす陰核背神経の切断という処置を行うことができるかどうかを見定めているのだ。
「リズ、あなたがやってみなさい」
サンダーソン先生は、最後に一人残った女性研修医――エリザベスを指名した。
エリザベスとは、ずいぶん前に一度だけ寝たことがあるが、それ以後は疎遠だった。というか、医学研修が進むにつれて、彼女とはライバル関係になっていったのだ。たぶん、この研修クラスでは、私に次ぐ成績のはずだ。
「はい、先生」
ついにいよいよかと私は覚悟を決めた――エリザベスなら、これまでの女性研修医たちと異なり、何ら躊躇せずに陰核背神経を切断することができるだろう。
もうすぐ、二度と見ることができなくなるだろう自分の陰核の姿を目に焼き付けておこうと、私は小型モニターの映像を注視する。それは、すでに半分以上千切れかかっていて、まさに最後の断末魔の様相を呈していた。あと、鋏をほんの二回入れるだけでお終いなのだ。

しかし、エリザベスは、なぜかだかはわからないが、外科用鋏の切っ先をおざなりにあてがっただけで、わざとらしく悩んだような態度を見せてから、サンダーソン先生の方に振り向くと、いかにも生真面目そうに告げる。

「先生、私が行うには若干難易度が高いようです」

いったいエリザベスは、どういうつもりなのだろう？　彼女ほどの腕前ならできないはずはない。不信に思いながら彼女を見上げた私は、目が合った瞬間に、その心情を理解する。

エリザベスは、私に対して負い目を持ちたくなかったのだ。これから長く続くだろう二人のライバル関係に余計な軋轢を生じさせないために、今回は身を引いたらしい——彼女は、私とサンダーソン先生の様子から、今、行われつつある事態の真相を正確に洞察しているようだった。

そして、それはエリザベスだけでなく、他の女性研修医たち全員にも言えた。彼女たちも、この臨床実習で、私に施されている『根本的な治療』が、私が自ら望んで受けているものではなく、実際にはサンダーソン先生によってなされている処罰であることをおぼろげながら理解しかけていた。

「わりました。あなたたちの婦人科医学研修での最終課程——臨床実習は減点対象となります」

四人の女性研修医たちにそう宣告したサンダーソン先生は、眼鏡をかけた小柄なゴードンの方に向き直って話しかける。

「それではゴードン、あなたの出番です。先ほど、デイビッドがやったのように上手にやってみなさい」

「はい、先生」

ようやく術者としての順番が回ってきたゴードンは、嬉しそうな顔でサンダーソン先生に返事をする。そのとき、他の者に気づかれないようにして、私に意地の悪そうな笑みを向けながら片目をつぶって見せた。その笑顔には、先日、成績の件で、私に矜持を深く傷つけられたことに対する意趣返しができるという喜悦以上に、もっ

と大きな心情の高ぶりが隠されているように感じられた。
　それに気づいたとき、私は自分が抱いていたゴードンに対する心証が間違っていないことを確信した。彼に対して、以前よりサディスティックな性向を有しているのではないかと密かに疑っていたが、どうやら正解だったようだ。彼は、臨床実習という名目の下、公然と女性器に致命的な損傷を負わせることができる今の状況を明らかに楽しんでいた。
　サンダーソン先生もゴードンのその性癖に気づいていたからこそ、手術実習の順番を一番後回しにして、彼が私の外性器に触れることがないように気遣ってくれたたのだろう。結果的には、女性研修医たちが全員パスしてしまったため、かえって、実際に私から陰核を断ち切るという、彼にとって最も大きな楽しみを与えてしまったようだが……。
　ゴードンは外科用鉗子をおもむろに取り上げると、それで陰核を挟んで持ち上げながら、神経の繋がり具合をわざとらしく時間をかけて調べる。それから、鉗子を左手に持ち替えて右手で細長い外科用鋏を取り上げると、いかにも乱雑な感じで刃先を切断部へあてがった。その無造作な手技に対して、すかさずサンダーソン先生が注意を与える。
「ゴードン、もっと慎重に……。そう。そこです――そこで切りなさい。僅かなりとも神経組織を残せば、それは患者にとって不幸です」
「はい、大丈夫です」
　サンダーソン先生のその注意に、ゴードンは、一応、真面目な表情で答えてみせたが、その刃先の動きは、繊細さを微塵も感じさせない乱暴なものだった。それによって下腹部内にかすかな痛み感じた私は、改めてモニターに映しだされているそれが自分の『もの』であり、今、自分の外性器が手術されているのだということを実感した。
「先生、切ります」

ゴードンは、言わずもがなの台詞を口にする――サンダーソン先生に知らせるというよりは、私に聞かせるために発したものに違いない。それと同時に、彼は外科用鋏の刃を無造作に閉じていく――私は目を大きく見開いて、情け容赦なく進められる陰核切除術の最終段階を凝視し続けていた。

そして、ついに外科用鋏の先端部が完全に閉じ合わされる――その瞬間、私は、先ほど為された陰核堤靭帯の切断よりもやや低い断裂音を聞いた気がした。同時に、モニター内では切断された神経線維が勢いよく跳ね上がる様が映しだされていた――その直後、局部麻酔をかけられていたにもかかわらず、信じられないような痛みが下腹部から背骨を貫いて脳髄を直撃した。

「――!」

思わず上げそうになる悲鳴を歯を食いしばって必死に堪える。私は、体を小刻みに震わせながら、今一度、これと同じ苦痛を体験しなければならないのかと恐怖におののいていた。だが、私のそんな心内など無頓着に、あるいは、知りつつ密かに楽しんでいるのか、ゴードンは、もう片方での切断作業も粛々と進めていく。

そして、再度、切断箇所にあてがわれた外科用鋏の刃が閉じ合わされる。その一瞬後に、再び同じ痛みが私の背中を駆け上がる――あまりの激痛に、無意識のうちに目を閉ざしてしまう。

性的な中枢器官を最後まで体に繋ぎ止めていた陰核背神経が二本とも断ち切られ、ついに私の陰核は完全に切除されてしまったのだ――もう二度と取り戻せないのだ。そんなふうに思うと、巨大な喪失感と底なしの絶望感が私の心に広がっていく……。

外性器の快楽中枢である陰核を失った私は、もう女性とのセックスではオルガズムを得ることはできないだろう。私は、決してレズビアンというわけではなく、男性ともセックスすることもできるが、どちらにしても、私のセックスライフに大きな影を落とすことは間違いない。

絶望感に苛まれたまま、きつく目を閉ざしている私に、サンダー

ソン先生が声をかける。
「ジョージー、目を開けなさい。まだ、婦人科医学研修の最終課程は終了していません。さあ、摘出された標本をよく観察しなさい」
私が閉じていた瞼を震わせながら開けると、目の前には、ゴードンによって差し出された外科用鉗子があった。そして、その長い鉗子の先には、真っ赤な血に染まった芋虫のようなものがぶら下がっている。それが芋虫と違うのは、頭の部分が少しくびれていて胴体が途中から二つ分かれているあたりだ。
それにしても大きい！　血だらけの芋虫もどきは、確かに十五センチ近い長さがあった。サンダーソン先生が言っていたとおり、子どものものなら陰茎だと言っても誰も疑わないだろう。本当にこんな大きなものが私の陰核なのだろうか？
だが、そう思ったのもつかの間、モニター越しではなく、生でそれを見つめていた私は、なぜだか、その芋虫の頭部に親近感を覚えた。
私がいつも自分自身で慰めるときに触れている部分にとても酷似している――そう自覚した途端、その芋虫状をした血まみれの器官が、つい今し方まで私の股間にあったはずの『もの』だと、ようやく事実として認識できた。
――その直後、私の意識は急激に暗闇に閉ざされた。

第八話　４１９号室にて――臨床実習後

「おはよう、ジョージー」
サンダーソン先生の声に、私は驚いて目を覚ました。
そこは、あの４１９号室だった。私は、その部屋の中央にある病院ベッドの上に横たわっていた。
――夢？
あれは、私の強迫観念が生み出した悪夢だったのだろうか！？
「あまりに動かないで。あれは夢ではなかったのだから。すべては現実。私は、今、あなたが混乱していることを理解しているわ。それも当然ね。あなたは自分の体から切り取られたクリトリスを間近に見た瞬間、気絶してしまったのよ」
「そ…、それじゃ、わ…、私のあそこにはもう……？」
私は外性器に鈍い痛みを感じながら、これからの自分自身の人生にとって非常に重要な質問を発した。
「ええ。あなた自身を悩ませ続けていた悪の芽は無事に摘み取られたわ。あなたには、もうクリトリスはないわ。体内にあった勃起性組織も陰核神経も、すべて完全に摘出したわ。でも、あなたの小陰唇の一部は残したわ――傷口が治れば、あなたのあそこはまだとても可愛らしく見えるはずよ。二、三日したら、あなたに手鏡を渡すわ。さしあたり今は、とても腫れあがって、青黒くなっている状態だから」
その説明を聞いた私は、外性器――正確には陰核があったあたりの痛みが増すのを感じた。
「それで……、その……摘出されたクリトリスは……？」
「ここにあるわよ。私は、それをホルマリンで保存したわ――とてもよい標本よ。正直に言って、もはや、あなたの『もの』だったようには見えなくなっているけど。血液が抜けるやいなや、あなたの

クリトリスは萎んでしまったわ。でも、この萎びた状態でさえ、まだ通常のものよりはずいぶんと大きいわよ」
サンダーソン先生が黒い布袋から引っぱり出したビンには、やや大きめの頭を持った芋虫のような青白い標本が封入されていた。全長が十二センチほどで、胴体の途中から二つに分かれている。確かに最後に見たときよりもずいぶんと縮んでいる感じがした。
そして、それは透明なホルマリン液の中を本当に心地よさそうに漂っていて、何というか、とても無邪気な感じに見えた。その微笑ましい姿は、私の体から摘出された『もの』とは思えなかった。
「……この処罰の内容を事前に聞いていたら、決して同意しませんでした」
私は、ぼそりと呟いた。
「いいえ。あなたは、確かに同意したわ！　あなたは、どんな処罰でも受け入ると、私に誓ったわ。そして、今回のような状況下では、とても寛大な処置だったと思うわ。いずれにしろ、選択を迫られたあなたは、最終的には、この処罰を受け入れたはずよ」
そうだ。あの時、確かにそう思った。しかし……。
「でも、どうして、そう言い切れるのですか！？」
私の睨みつけるような視線にも動ぜず、サンダーソン先生は落ちついて答えた。
「私にはわかるわ。蛙の子は蛙――ジョージー、今、私の机の上には二つの美しい石膏標本が飾られているわ。今度、あなたが私の部屋に来たときに、その二つがどれくらい酷似しているか見比べてみるといいわ」
「……申し訳ありません。先生のおっしゃっている意味がよくわかりません」
私は、サンダーソン先生が何を言っているのか本当にわからなかった。
「今も言ったように、蛙の子は蛙――つまり、あなたのお母さまは、自ら進んで私の処罰を受け入れたわ。だから、あなたも自ら進んで、

それを受け入れたに違いないわ。あなたのお母さまも、自分自身の『もの』を封入したビンを持っているわ。あなたのお母さまが、これまでのあなたと同じようなふしだらな生活を過ごしていたとしたら、今の成功があったと思って？」

あの謹厳実直な母が陰核切除術を受けていた!?　いや、受けさせられていた!!　自分が母と同じ医師の道を志しただけではなく、同じように道を踏み外しかけていたという現実、そして、母が私と同じようにサンダーソン先生によって陰核切除術を施されたという過去に、私は言いようのない衝撃を受けた。

驚きのあまり茫然自失となっていた私だったが、しだいに落ちつきを取り戻すと、ある方程式が見えてきた。私の母は、この苛酷な試練を乗り越えて現在の大成を勝ち得たのだ。それならば、私にも未来を掴むチャンスがあるはずだった……。

私は、ふと思い当たって尋ねてみた。

「サンダーソン先生、先生も私たち母子と同じようなビンを持ってらっしゃいますか？」

「……さあ、どうかしらね？　あなたの想像に任せるわ。――ともかく、あと三日ほどは安静にしていなさい」

エメラルドグリーンの瞳に柔らかい笑みを浮かべて、そう答えたサンダーソン先生は、机の上に大きめの封筒と私の陰核が入ったビンをそっと置くと、静かに部屋を出ていった。

私は股間からの鈍痛に耐えながら病院用ベッドから降りると、ゆっくりと机に近づいた。私の陰核が封入されたビンの隣に置かれた封筒を取り上げると、その中を覗いてみた――数枚の写真とペーパーが一枚入っていた。

袋から取り出してみると、それは摘出された陰核と定規をいろいろな方向に並べて写した医学用の記録写真で、それぞれに各部のサイズを表す数値が克明に記入されていた。そして、やや厚めのペーパーの方は公的な証明書だった。

『婦人科医学研修課程修了証書

２００X年１２月１日

ジョセフィーヌ・ホーカー殿

ここに上記の者が聖ジョセフ病院における婦人科医学研修の全課程をレベル３Aの成績で修了したことを証明する。

聖ジョセフ病院婦人科部長　マーガレット・サンダーソン』

私は自分自身の陰核と引き替えに手にすることができた婦人科医学研修課程の修了証書を机の上にに戻すと、ビンの中身に視線を向けて、それをじっと見つめた。

唐突に、乳房の先端に疼きを感じて自分の胸を見下ろした。私は、それを信じることができなかった。二つの膨らみの先端を飾る乳首は固く勃起していた。自分自身の体から切り離された『もの』を眺めているだけで、私の体は性的に興奮し始めていたのだ。

私は、陰核が自分から切り取られたことに安堵している一方で、まだ自分が持つことができる性的な快楽があることに嬉しさを感じていた。

第八話　４１９号室にて——臨床実習後（後書き）

この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作は今は亡き　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ グループに投稿された　Ｍｅｒｅｄｉｔｈ　氏による、„Ｍａｋｉｎｇ　Ｒｏｕｎｄｓ.„です。日本と違って海外では非常に多くの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説が書かれていますが、その中でもベスト１０に入るだろうと訳者が個人的に思っている傑作中の傑作です。

Ｍｅｒｅｄｉｔｈ　氏は、この作品以外にもいくつの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説を書いていますが、残念なことにｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　界から去ってしまっており、ここ何年も新作を執筆していません。

作品のタイトルについてですが、これにはずいぶんと悩みました。原題の　„Ｍａｋｉｎｇ　Ｒｏｕｎｄｓ.„　は単純に訳すと『巡回』となります。しかし、話の内容からすると、どうもしっくりしません。単語レベルでいろいろと意味をすり合わせた結果、„Ｍａｋｉｎｇ„　を『作ること』あるいは『製作』とし、„Ｒｏｕｎｄｓ„　を『丸彫り（像）』とし、それを組み合わせて　„Ｍａｋｉｎｇ　Ｒｏｕｎｄｓ.„　を『彫像造型』という意味合いに取ってみました。さらに、それを内容に合わせて『石膏標本』と意訳してみました。

なお、自分には医学的な知識はまったくありませんので、本文中の陰核を切除する手術シーンの描写や手術中の登場人物たちのセリフに関しては、けっこういい加減です——というか、ほとんど妄想の産物です（笑）